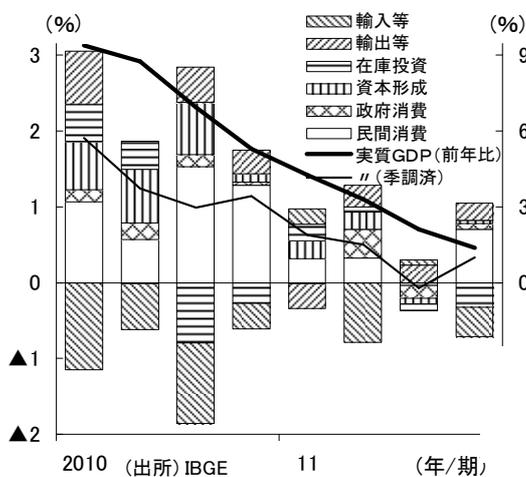


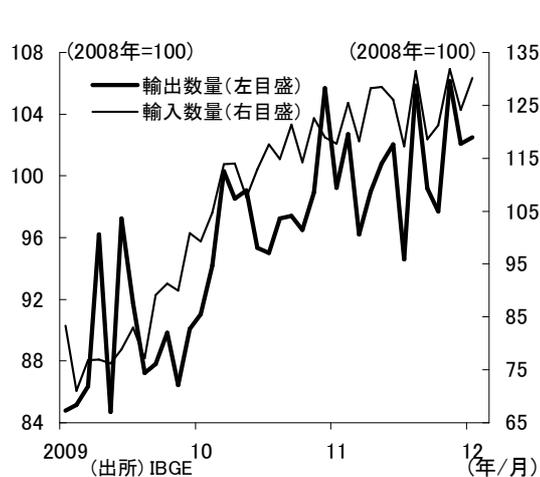
ブラジル経済は底入れ ～ 底堅い民間消費と輸出構造の変化 ～

- (1) ブラジルの成長鈍化(図表1)。実質経済成長率は前年比で2010年1～3月期の9.4%をピークに11年10～12月期は1.4%。年間でも10年の7.5%から11年2.7%へ急減速。もっとも10年の高成長はリーマン・ショックに伴って大きく落ち込んだ09年の反動影響も。10年1～3月期の実質GDPは、季調済で09年を5.7%凌駕し、年初段階で10暦年の7.5%成長のうち大半が達成。そうした観点から前期比の推移をみると、年率ベースで11年7～9月期▲0.2%のマイナス成長から10～12月期1.2%に回復。原動力は民間消費と輸出。
- (2) 民間消費は所得雇用環境改善に加え、消費者マインド上昇が原動力。根底には急速な経済成長に伴う労働需給逼迫(参照:リサーチ・アイNo.2011-164『逼迫するブラジル労働需給』)。当面、底堅い消費拡大が展望。一方、輸出入数量をみると、まず輸入数量は、内需の盛り上がりを映じて10年半ばまでハイペースで増加した後、一進一退(図表2)。それに対して輸出数量はリーマン・ショックの反動で10年初まで急回復した後、一進一退。もっとも細かくみると、10年末をピークに減勢に転じた後、11年半ば以降、緩慢ながら増勢回復の兆し。11年半ばから秋口の時期はレアルが歴史的な高値圏に上昇した局面。同国輸出は資源中心で為替影響を受け難い構造ながら、やや不可解。
- (3) そこで輸出数量を一次産品と製造製品に分けてみると、製造製品は11年半ば以降弱含みでレアル高の影響が看取(図表3)。11年半ば以降の輸出数量増は一次産品。もっとも内訳をみると、鉄鉱や蔗糖の増勢が鈍化する一方、粗鋼や製糖の増勢が加速するなど製品高付加価値化の動きに拮抗。さらに本年に入りコーヒー豆の増勢に一段と翳りが拮抗するなど所得水準の上昇と国内消費の増加を受けた輸出見直しの動きも。対内直接投資はレアル高で11年秋一時的に減少したものの、年末以降、再び盛り上がり(図表4)。設備投資も復調に向かうなか、本年は4%前後の底堅い成長の見通し。

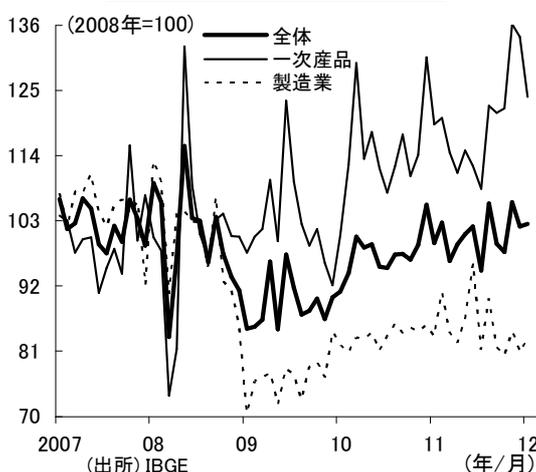
(図表1) ブラジル実質経済成長率(季調済)



(図表2) 輸出入数量(季調済)



(図表3) 財別輸出数量(季調済)



(図表4) 対内対外直接投資とドル相場

